高齢者、障害者の枠を外した活動に接して

メル友が民家を借りて開設した交流サロンの見学に、昨日行ってきた。
この交流サロンは、パンフレットに「今日はわたしのために、明日はあなたのために」とあるように、障害者、高齢者、地域、年齢、性別等のあえて枠を設けず、また、既存の制度等の柵（しがらみ）を極力排除してのユニークな交流の場の印象を受けた。

民家は、バリアフリー化（入り口、庭、広い廊下、トイレ、等々）されており、利用する障害者用に改修したと思っていたら、家主の高齢の母親用に改修したが、その方が亡くなられたので借用したと聞いて、タイミングよく適切な家が見つかったものと、話を聞いて驚いた。
やはり真摯で直向きな人には、世の人はチャンスを与えるのだろうか。

確かに、高齢者、障害者のために、介護保険制度、障害者自立支援法等の枠区分での施策は進んでいるが、枠や制度の柵を排除しての取り組みは、時代の先を見通しての活動と、いたく感服した。
というのも、介護保険制度利用に至らない一人暮らしの高齢者の問題も、次第に社会的にクローズアップされてきている。
例えば、団地等での高齢者の孤独死の問題、また、万引きした一人暮らしの高齢者の１／３は、「日頃、会話する人は居れば、こんなことをしない。」と告白するとかの報道に接していたからかも知しれない。

見学の折も、地域の高齢者も買い物帰りに隣近所に気軽に顔を出したかのように、お茶飲みしながら世間話を共にした。
また、この方（一人暮らしではない）には、ご近所の「はらこ飯作りなら、この人」との推薦で、先日はランチの指導を受けたとか。

一方、障害のある方々も、自立支援法絡みで他の障害者センター等で活動もしてるが、フリーな、家族的な雰囲気のこのサロンに、時々集ってくるとか。

地域の方々とも、高齢者、障害者の枠にとらわれない交流の場があることは、これからの施策のあり方を暗示していないだろうか。
正に、「地域で共に生きる」という実践活動でないだろうか。

気負いなく、淡々と一歩を踏み出した勇気あるメル友のささやかな実践活動が、次の時代の福祉施策へのヒントを与えてくれるのだろうなあ。
福祉制度活用が福祉でなく、法、制度の谷間の取り組みこそが福祉の神髄であろうと思うだけに、メル友へ大きなエールを送りたい！

阿部幸泰　（2007 年 1 月 23 日　記）